



中学校の運動部指導者の 関わりが部内の人間関係 および生徒の精神的状態に 与える影響

The Influence of coaches' involvement with players on
human relations and mental condition in junior high school clubs

藤後悦子 TOGO, Etsuko

東京未来大学こども心理学部 教授

大橋 恵 OHASHI, Megumi M.

東京未来大学こども心理学部 准教授

井梅由美子 IUME, Yumiko

東京未来大学こども心理学部 講師

本研究は、指導者の選手への関わり方が部内のいじめやその後の選手の精神的不健康に及ぼす影響の解明を目的とした。中学時代運動部員であった大学生293名(男子105名,女子188名)を対象に男女別及び競技種別による多母集団同時分析を行った。その結果、指導者の肯定的な関わりと否定的な関わりがそれぞれ影響することが示された。

キーワード 部内いじめ, 中学, 運動部, ハラスメント

1. 問題と目的

現在, 中学生の部活動は盛んであり, その中でも運動部加入率は高い(男子75.1%, 女子54.9%; スポーツ庁, 2017: 2)。一方で運動部の課題として, 体罰・暴力問題(植村・友添・清水, 2013; 森川, 2013), 指導者の負担や多忙化の問題(三木, 2013; 三本木・高橋, 2008), 土日の出勤はボランティアであるという制度的問題(杉本, 2013)などが指摘されている。

本研究では, 運動部内の指導者による生徒への体罰および不適切な指導をハラスメントと呼び, 検討していく。体罰とは, 文部科学省によると「身体的性質のもの, すなわち, 身体に対する侵害を内容とするもの(殴る, 蹴る等), 児童生徒に肉体的苦痛を与えるようなもの」(文部科

学省, 2013: 1) など, 主に身体的な暴力を指す。一方で不適切な指導とは, 神奈川県教育委員会(2013: 3)の定義によると, 「人格を否定するような暴言」, 「大きな声や威圧的な態度等の高圧的な指導」, 「不必要な身体接触」, 「無視やいやがらせ」など, 児童・生徒を深く傷つける行為を指す。本研究では, 指導者の生徒へのハラスメントに体罰および不適切な指導の両者が含まれると捉えることとする。

さて, ハラスメントの下位概念である体罰と生徒間の問題行動であるいじめとの関係について, 文部科学省(2013)は, 体罰がいじめを助長する可能性を指摘している。文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2016)によると, いじめの認知件数は, 小学校中学年から増

加し、中学校1年生でピークを迎える。いじめのピークが教科担当制や部活動が開始され、発達の思春期に移行する時期に重なることは偶然ではない。中学生の日常生活では教室での生活とともに、部活動が大きな位置を占める。部活動は生徒の成長を促す教育的側面を持つ一方、生徒指導上、問題行動の舞台になると社会一般に認識されている(長谷川,2013)。部活動は、閉鎖性が高く中で何が起きているのかを周囲が把握しづらいため、体罰やいじめが発生、継続しやすいからである(本間,2003)。部活動では能力や経験や知識などの違いが明確になりやすいが、それは運動部において著しい。Smoll and Smith (2002)によると、そもそも運動部では、強豪チームか否かに関わらず競技力が求められ、特に男子の場合、仲間集団における社会的地位の最も重要な決定因には競技力が関連する。つまり競技能力の高い者が集団内地位も高くなることが多いのである。特にチーム競技においては、一人のパフォーマンスが全体に影響を及ぼすため、能力の低い者がいじめの攻撃対象となる危険性が高いだろう。

それでは、部活動内でのいじめの実態はどのようなものであろうか。長谷川(2013)が高校生1754名を対象に行った調査によれば、チーム競技系運動部で最もいじめが発生しており、下級生への暴力は7.3%、部員同士のいじめは10.0%見られた。さらに、長谷川(2013)は、部の競技レベルが高いほどいじめは発生し、これらのいじめは指導者の問題行動が起点となっていることを明らかにした。勝利にこだわりすぎると、指導者は体罰を用いる場合もあり、体罰は選手間の暴力、実力が低い者に対する見下しや蔑み行為の容認や連鎖を引き起こすことが実証されているのである。例えば、指導者が特定の選手のみ叱責し続けたら、部員達にその選手は競技実力がなく、チームの役に立たないということを暗に伝えることになる。大野(1996)の実験によれば、ある攻撃が単独の加害

者によって行われた場合よりも集団で行われた場合の方が、被害者に責任があり性格に問題があると参加者により判断されていた。これは、いじめの被害者に何ら問題のない場合でも、複数による「いじめ」の攻撃が行われると、「いじめ」に関わっていない第三者は、被害者にも問題があると判断してしまうことを示す。つまり、指導者が「被害者にも問題がある」としてハラスメントを行うと、それをモデルとしてレギュラーの部員が競技力の低い部員への攻撃が行われ、被害者以外の部員や部活担当以外の教員も同様に「被害者にも問題がある」との判断を強めてしまうのである。さらに、いじめの成立には傍観者の数が関係しており、傍観者の数が多い場合、いじめを許容する風土が形成されてしまう(森田・清永,1986)。多くの人が傍観という同じ行動をとることで自分のリスクも小さくなり、同調行動が生まれやすい。部活動ではないが、教室の中で、不適切な権力を行使した教師の指導はいじめの抑制につながらず、いじめを促進することも示唆されている(大西・黒川・吉田,2009)。さらに、教師がやつあたりやえこひいきをすると答える生徒の割合が高い学級にいじめがよく生じていた(秦,1999)。以上より、指導者のハラスメントは部内いじめに影響があると考えられるであろう。

このように指導者のハラスメントが部内いじめにつながった場合、結果としてどのような影響を選手に与えてしまうのか。教育心理学や教育学では、学級におけるいじめが生徒達に与える影響について多方面から研究されている。例えば、中学校を卒業した約2,000人と高校生約1,100人を対象にした調査では、仲間からの排斥が抑うつ症状に有意な影響を与えていた(三島,2015)。部内いじめでも同様なことが言え、被害者は抑うつや不安が強くなるという精神的不健康が表れるであろう。また他者からの排除を経験すると常に他者の顔色をうかがうようになり、ひいては仲間という重要な他者からの評価やブ



レッシャー (佐々木,2004) は、競技に失敗したらどうしようとする競技不安を強め、自尊心の低下や身体反応が生じる可能性も高めてしまう。

以上より本研究では、運動部の部内いじめ被害のモデルを検証することを目的とし、以下の仮説モデルを立てた。なお本研究は、部内いじめのみを取り上げるのではなく、その先行要因としての指導者の関わり方、その帰結としての選手の精神的状態までを含めた因果モデルを検討した点に特徴がある。仮説モデルは、「指導者の部員へのハラスメントは、部内いじめ被害を予測し、この両者は生徒の部活を通じた精神的不健康に影響を与える」とした。加え、指導者のハラスメントおよび部内いじめ被害の発生には、個人および部レベルが関連すると考えられ、これらも要因として取り上げた。

なお本来ならば、中学時代の部活動がテーマであるため中学生を調査対象とすべきであるが、「いじめ」のデータを当事者から得ることは倫理的に困難である。そこで、大学生を対象にした回想法を用いた。中学校の部活動は活発なものが多く、その体験が大学生になっても話題に上ることが多々あるため、十分に印象に残っていると考えられる。

2. 予備調査

本調査で使用する項目を選定するために、自由記述法で実施した。

2-1 調査対象と手続き

東京都の私立大学の2年生219名(男子77名、女子142名)を対象とした。2012年7月に、スポーツを通じた楽しい経験と嫌な経験について尋ねる無記名式質問紙を心理学の授業後に配布し、その場で回答を得た。

2-2 質問項目

当初は指導者によるハラスメントと部内いじめ被害に関する内容に限定したエピソードの収

集を考えた。しかし、いじめに関しては抵抗感を抱く人もいることを考え、より広くスポーツに関するネガティブな体験や、指導者のポジティブおよびネガティブな関わりについての体験を尋ねた。なお生徒は「指導者」という言葉は通常使わないため、質問紙では日ごろなじみのある「顧問やコーチ」という言葉を用いた。

2-3 結果

はじめに、スポーツに関するネガティブな体験は、自分自身について、指導者関係、対人関係、仲間関係、相手チームとの関係に分けられた。指導者関係に関しては、「強い選手や強い部が優先されて、他の子はほっとかれた」、「言葉でひどいことを言われた」、「ミスすると怒鳴られた」、「ミスすると叩かれた」、「できない子に『のろま』など罵声を飛ばしていた」などが挙げられた。仲間関係では、「まじめに練習しているのに仲間外れにされた」、「うまい人から『下手くそ』と言われた」、「連絡網から外された」、「ミスすると嫌味を言われた」などが挙げられた。これらネガティブな内容の中でハラスメントやいじめに当たるものを複数の大学教員(社会心理学専門1名、臨床心理学専門2名)により確認した。

一方、指導者からのポジティブな関わりは「褒められた」、「認められた」、「丁寧に教えてくれた」などが挙げられ、仲間とのポジティブな関係は「協力できた」、「みんなで励まし合った」などが挙げられた。ポジティブな内容に比べ、ハラスメントやいじめなどのネガティブな内容は多くの種類が示され、具体的なエピソードが多かった。

3. 本調査

3-1 調査対象と手続き

東京都の私立大学に在籍する557名の学生(男子157名、女子400名)を調査対象とした。対象校は予備調査と同一だが回答者の重複はなかった。なお、本研究は東京未来大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

2013年7月と2014年5月に無記名式質問紙を2年次必修科目の授業終了後に配布し、その場で記入を求めた。回答は自由意志であること、匿名性が保たれること、成績に関係しないことを口頭および文書で伝え同意を得た。各年度2年生のみを対象としたため回答者の重複はなかった。

3-2 質問内容

(1) 部活動経験

中学校時代の運動部所属経験の有無を確認するために、中学校で所属していた部活動の記載を求めた。

(2) 競技レベルと部レベル

中学校時代の個人の競技レベルを、スタメン／レギュラー、準レギュラー、補欠、それ以下の4段階で尋ねた。また部の競技レベルを、全国大会レベル、県(都)大会レベル、地区大会上位レベル、それ以下の4段階で尋ねた。得点が高い方が、部レベル及び競技レベルが高いこととなる。

以下すべての尺度においては、全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)の6件法で尋ねた。

(3) 指導者の関わり方

今後の介入につなげるためにも適切な対応がどのように部内いじめ被害を抑制するのかを確認する必要があるため、ハラスメントを含む指導者の関わり方尺度を作成した。初めにハラスメントの内容としては、富江(2008)の大学生564名を対象とした中学・高校生時代の運動部の体罰に関する調査の自由記述から、件数が多かった「叩かれる」、「こづかれる」などの身体的体罰を採用した。加えて、予備調査から指導者の言葉による精神的苦痛に関する項目を使用した。さらに、指導者の適切な関わりについて、教師との関わり経験尺度(中井・庄司,2009)の受容経験を参考に、理解、相談、承認に関する内容8項目を指導者の関わり方尺度とした(具体的な項目は表1参照)。

(4) 部内いじめ被害

予備調査において自由記述の件数が多かった精神的苦痛や関係性攻撃に関する内容11項目を取り上げ、部内いじめ被害尺度とした(具体的な項目は表2参照)。

(5) 部活動による精神的不健康

部活動による精神的不健康を測定するために、いじめ影響尺度(香取,1999)から神経症に関する内容の中の6項目を用いた。内容は身体的影響(不調を感じる)、精神的影響に関するネガティブな側面(否定的な考え、攻撃性、不安感)であった。教示文は「スポーツでの嫌な体験を通して、自分が変わったと思うことについてお聞きします」とした(具体的な項目は表3参照)。

4. 結果

4-1 回答者の属性

中学校での部活動経験は、男子では運動部130名(82.8%)、文化部17名(10.8%)、部活なし8名(5.1%)、運動部と文化部の兼部2名(1.3%)であった。女子では運動部234名(58.5%)、文化部150名(37.4%)、部活なし9名(2.3%)、運動部と文化部の兼部7名(1.8%)であった。本研究では運動部に所属し、かつ欠損値がない293名(男子105名、女子188名)を分析対象にした。

運動部の種類は、チーム競技と個人競技が約半数ずつであった。チーム競技の内容としては、男子では、サッカー、野球、バスケットボール、女子では、バスケットボール、バレーボールなどが挙げられた。一方個人競技としては、陸上、テニス、体操、水泳、剣道、柔道などが挙げられた。

4-2 尺度構成

はじめに「指導者の関わり方」、「部内いじめ被害」、「部活動による精神的不健康」の各測定尺度について因子分析(主因子法)を行った。まず初期解の回転法にプロマックス回転を用いたところ、「指導者の関わり方」と「部内いじめ被害」では因子間相関が0.3以下であったため、



表1 指導者の関わり方尺度に関する因子分析(主因子法,バリマックス回転)

	I	II	共通性
指導者ハラスメント($\alpha = .872$)			
顧問やコーチは、私が失敗するとこづいた。	.808	-.082	.719
顧問やコーチから、ためいきや舌打ちをされた。	.800	-.119	.654
顧問やコーチから、「ばか」「センスがない」など人格や能力を否定するような言葉で怒られた。	.799	-.150	.484
顧問やコーチから、たたかれたり、物を投げられたりした。	.752	-.050	.568
指導者サポート($\alpha = .862$)			
顧問やコーチは、自分の気持ちを理解していた。	-.021	.848	.685
顧問やコーチは、自分のことを気にかけてくれた。	-.243	.791	.660
顧問やコーチに、自分の得意なことを認めてもらった。	-.155	.774	.623
困ったときに、顧問やコーチに相談のってもらった。	-.016	.696	.660
平方和	2.580	2.473	
寄与率(%)	32.247	30.910	

これらについてはバリマックス回転を採用した。その結果、指導者の関わり方では、固有値の減衰状況(3.548,2.233,0.550,0.436)より2因子が抽出された(累積寄与率63.16%)。表1に示す通り、第一因子は、身体的な体罰とともに言葉による精神的な苦痛が関連深いため、「指導者ハラスメント」($\alpha = .872$)と命名した。第二因子は選手に対するサポートの内容が主であったため、「指導者サポート」($\alpha = .862$)と命名した。

つぎに、部内いじめ被害項目についても同様に因子分析を行った結果、固有値の減衰状況(5.486,1.967,0.899,0.648,0.572)より2因子が確認された(累積寄与率59.79%,表2)。第一因子は、言葉による嫌がらせや無視などで構成されていたため「被疎外」と命名した($\alpha = .932$)。第二因子は、直接的な嫌がらせの内容であったため、「被攻撃」と命名した($\alpha = .674$)。被攻撃の α 係数が低めであったが、プロマックス回転を行っても同じ因子構造であったこと、項目数が少なく α 係数が高くなりにくいこと、また項目間相関はすべて有意であったことからこれらを採用することとした。

最後に部活動による精神的不健康に関する6項目について因子分析(主因子法,プロマックス回転)を行った結果、2因子が抽出されたが、因子負荷量が両因子に0.4以上あった1項目を削除し、再度5項目で因子分析を行った。その結

果、固有値の減衰状況(2.842,0.989,0.503,0.387,0.279)より、2因子構造が確認された($r = .571$)。累積寄与率は、60.05%であった。第一因子は、体の不調や否定的思考などが挙げられたため「神経症的症状」($\alpha = .852$)とし、第二因子は、誰かと一緒にないと不安や目立たないようにするという内容が示されたため「対人不安」($\alpha = .663$)と命名した(表3)。各尺度内の関連する項目を合算して項目数で割った平均値を各下位尺度得点とした。

4-3 多母集団同時分析による部内いじめ被害モデルの検討

部活動の指導者の関わり方と部内いじめ被害が精神的不健康への影響を予測するモデルを構築するために、先行研究に基づいて仮説モデルを立て、最尤推定法を用いて共分散構造分析を行った。モデルで用いた各尺度得点について説明すると、部レベルおよび競技レベルは、得点が高いほど各競技レベルが高いことを示す。指導者ハラスメント、指導者サポートは得点が高いほど、指導者ハラスメント、指導者サポートがそれぞれ多いことを示す。また部内いじめ被害の下位尺度である被疎外と被攻撃は、得点が高いほど疎外された経験、及び攻撃された経験が多いことを示す。精神的不健康尺度の下位尺度である神経症的症状得点、対人不安得点は、得点が高

表2 部内いじめ被害尺度に関する因子分析(主因子法,バリマックス回転)

	I	II	共通性
被疎外($\alpha=.932$)			
他の人だけに話しかけて私の存在を無視した。	.850	.239	.751
自分のことを気にかけてくれていた(逆)。	.843	-.067	.693
必要な連絡事項を伝えてもらえなかった。	.837	.163	.716
自分の気持ちを理解してくれていた(逆)。	.828	-.256	.519
やりたくないことを強制された。	.809	.133	.326
自分のことを認めてくれていた(逆)。	.799	-.234	.450
失敗すると、ためいきや舌打ちをされた。	.724	.180	.780
困ったときに、相談にのってもらった(逆)。	.704	-.153	.727
被攻撃($\alpha=.674$)			
「ばか」や「センスがない」など人格や能力を否定するような言葉で悪口を言われた。	-.111	.661	.672
ひそひそ話をされた。	-.034	.620	.557
話しかけても無視された。	.151	.551	.385
平方和	5.170	1.407	
寄与率(%)	46.998	12.793	

表3 部活動による精神的不健康に関する因子分析(主因子法,プロマックス回転)

	I	II	共通性
神経症的症状($\alpha=.852$)			
部活に行こうとすると、体に不調を感じるようになった。	.866	-.015	.735
物事を否定的に考えてしまうようになった。	.845	.000	.713
イライラしやすくなった。	.717	.026	.537
対人不安($\alpha=.663$)			
誰かと一緒にいないと不安に思うようになった。	-.066	.719	.467
目立たないようにしようと思った。	.104	.678	.551
平方和	2.344	1.659	
寄与率(%)	49.430	10.618	

いほどそれぞれ神経症的症状および対人不安が高いことを示すものである。

先行研究で性別および競技形態による違いが指摘されていたため、男女別、および競技形態別に分析を行ったところ、ともにモデルの適合は良好であった(男子GFI=.994, AGFI=.964, RMSEA=.000; 女子GFI=.984, AGFI=.912, RMSEA=.078/チームGFI=.983, AGFI=.903, RMSEA=.079; 個人GFI=.989, AGFI=.940, RMSEA=.025)。

次に性別、および競技形態によってモデルが異なるかどうかを確認するために多母集団同時分析を行った(図1,2)。等値制約を置かずに分析を行ったところ、適合度は良好であった。パス係数の一対比較男女において係数が複数有意になった。次にこれら有意になったパスに制約

をかけて等値制約を用いたモデルにより分析を行った。両者を比較した結果、当てはまりがより高かった「制約なし」のモデルを採用することとした。

性別ごとの分析の適合度指数は、GFI=.989, AGFI=.944, CFI=1.00, RMSEA=.000と十分な値であった。分析の結果、有意になったパスを図1に示す。男女モデルともに、指導者ハラスメントが強いほど(男子.34, 女子.33)、指導者サポートが弱いほど(男子-.29, 女子-.31)、部レベルが高いほど(男子.44, 女子.36)、部内いじめの被疎外得点が高かった。また女子においてのみ競技レベルが低いほど被疎外得点が高かった(-.14)。一方、部内いじめの被攻撃は、男子では競技レベルの低いほど(-.22)、女子では指導者サポートが強いほど(.24)、被攻撃得点が高かった。

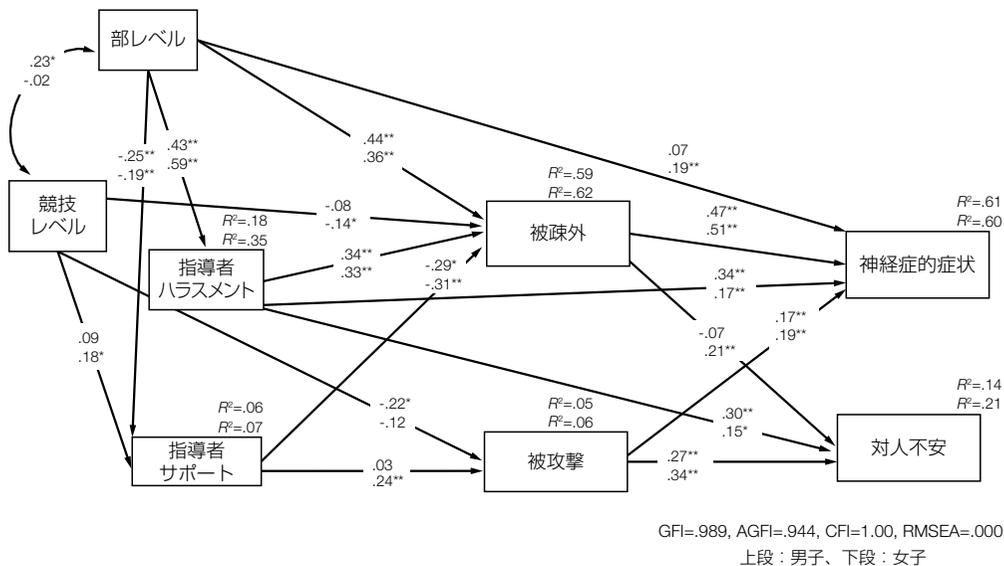


図1 男女別，多母集団同時分析による部内いじめ被害モデル（誤差項および有意ではないパスは省略）

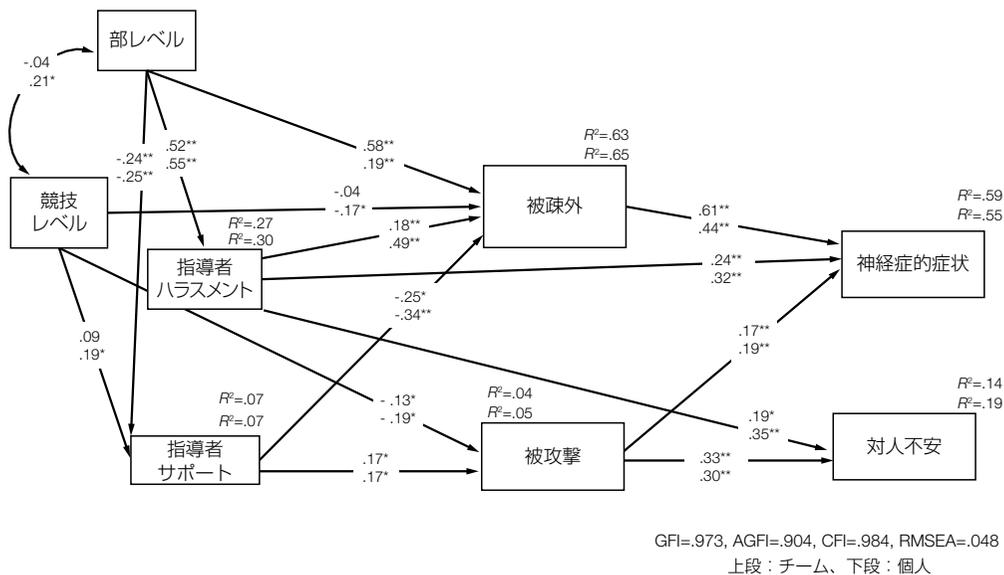


図2 競技種類別（チーム/個人），多母集団同時分析による部内いじめ被害モデル（誤差項および有意ではないパスは省略）

さらに、男女とも部内いじめの被疎外(男子.47, 女子.51)や被攻撃(男子.17, 女子.19)が強いほど、指導者ハラスメントが強いほど(男子.34, 女子.17)、神経症的症状の得点が高かった。男女とも部内いじめ経験の被攻撃が強いほど(男子.27, 女子.34)、女子の被疎外経験が強いほど(.21)、指導者ハラスメントが強いほど(男子.30, 女子.15)、対人不安得点が高かった。性別のパス係数の一対比較において、部レベルと競技レベルの相関係数、指導者ハラスメントから神経症的症状へのパス係数、指導者サポートから被攻撃へのパス係数、被疎外から対人不安へのパス係数に有意差が示された。

次に、等値制約を置かない競技形態別の多母集団同時分析の結果、適合度指数は、GFI=.973, AGFI=.904, CFI=.984, RMSEA=.048と十分な値であった。チーム競技・個人競技モデルともに、部レベルが高いほど指導者ハラスメントが強く、部レベルが低いほど指導者サポートが強かった。また、部内いじめ被害の疎外得点は、部レベルが高いほど(チーム.58, 個人.19)、競技レベルが低いほど(個人-.17)、指導者ハラスメントが強いほど(チーム.18, 個人.49)、指導者サポートが弱いほど(チーム-.25, 個人-.34)、被疎外得点が高かった。また、被攻撃は、競技レベルが低いほど(チーム-.13, 個人-.19)、指導者サポートが強いほど(チーム.17, 個人.17)、被攻撃得点が高かった。そして、精神的不健康の神経症的症状は、部内いじめの被疎外(チーム.61, 個人.44)と被攻撃(チーム.17, 個人.19)が強いほど、指導者ハラスメントが強いほど(チーム.24, 個人.32)、神経症的症状が強かった。さらに精神的不健康の対人不安は、指導者ハラスメントが強いほど(チーム.19, 個人.35)、被攻撃が強いほど(チーム.33, 個人.30)、対人不安が強かった。競技形態のパス係数の一対比較では、部レベルから被疎外へのパス係数、指導者ハラスメントから被疎外へのパス係数に統計的有意差が示された。

5. 考察

従来の学級を中心としたいじめ研究では、教師の指導スタイルによりいじめ容認の風土が容易に作られることが指摘されてきた(山岸, 2002)。学級と比較して、部活動では上下関係が明確であり、指導者や上級生からのしごきが容認されやすい(Rees, 2010)。特に運動部では、勝利至上主義に傾倒すると、強い者が力を持つという部内格差の風土がいじめを促進させるという報告もある(近藤, 2014)。そこで、本研究は、指導者の関わり方が部内いじめ被害へ、そして部内いじめ被害を媒介として、精神的不健康に影響を及ぼすというモデルを立てた。指導者の関わり方をポジティブな側面である指導者サポートとネガティブな側面である指導者ハラスメントに分類し、それぞれの関わり方が部内いじめ被害にどのような影響を及ぼすかを男女別および競技形態別に検討した。

モデルを検証した結果、部内いじめ被害の被疎外へは指導者ハラスメント、指導者サポートと部レベル、精神的不健康へは部内いじめと指導者ハラスメントによる直接的影響が大きかった。以下、部内いじめ被害を生み出す指導者の関わり方、中学生の部活を通じた精神的不健康について述べていく。

5-1 競技レベルと指導者の関わり方との関係

まず、指導者の関わり方に影響するものであるが、指導者ハラスメントは部レベルが高いほど多く、指導者サポートは部レベルが低いほど多い点は性別および競技形態別のモデルともに共通であった。一方、競技レベルは、女子および個人競技においてのみ、競技レベルが高いほど指導者サポートが多いという形で指導者の関わり方に影響していた。

部レベルが高いということは、より勝利を目指し「勝ち」にこだわる傾向が強いことを意味するのであろう。勝利至上主義とハラスメント



は関連すると指摘されており、部活動は短期間で結果を出さないといけないため、部レベルが高いほど指導者ハラスメントが強まるという今回の傾向は理解できる。換言すれば、部レベルが低ければ、指導者は「勝ち」にこだわらずにすむために、競技の楽しさや生徒の主体性を重視するような関わりが可能となるのであろう。

なお、部レベルと競技レベルとの関係には性差が見られた。男子では正の有意な相関が示されたが、女子では示されなかった。これは、男子では地域スポーツとして野球、サッカー、バスケットボール等が盛んであり、競技経験者が中学校の運動部へ入部することが多い。また中学生の部活動では、競技レベルが高い選手はより強い部がある中学を選択することも多いため、部レベルと競技レベルは男子で有意な相関が示されるのであろう。一方女子の入部が多い、テニス、バレーボール、バドミントンなどは中学から始める者も多く、そのため部レベルと競技レベルには有意な相関が示されなかったのであろう。

5-2 部内いじめ被害を生み出す 指導者の関わり方

次に、指導者のかかわり方が部内いじめにどのように影響するかであるが、指導者ハラスメントが強いほど、部内で疎外される経験が強くなり、その傾向は性別、競技形態を問わずに見られるが、特に個人競技においてその傾向が示された。部内で疎外される経験は部レベルからの直接効果も見られ、部レベルが高いほど疎外された経験が強かったが、その傾向はチーム競技でより顕著であった。一方で、指導者のサポートが強いほど、疎外経験が弱いという傾向が性別・競技形態とともに共通して見られた。ただし、女子において、指導者サポートが強いほど部内で攻撃される経験が強いという特徴が見いだされた。

はじめに、指導者ハラスメントが部内いじめの被疎外を高めることについてだが、山岸(2002)は、学級内のいじめを例に挙げ、リーダーである

教師がいじめについて強い倫理観を持っていないといじめ抑制行動を選択する生徒は減ってしまうことを指摘している。つまり、本来であれば部活の指導者がいじめは悪いことであるという倫理観を打ち出さないといけないが、倫理観を打ち出すことをせずに、かつ指導者自身がハラスメントを行っていることは、指導者そのものがいじめ行動のロールモデルを示していることになる。スポーツ場面における指導者とのネガティブな体験の調査では、「失敗するとこづかれた」「ためいきや舌打ちをされた」などの、ミスや失敗に関わるものが多く報告された(藤後・井梅・大橋, 2015: 98)。つまり選手にミスや失敗が生じると、指導者はハラスメントを行いやすく、そのことは能力の低い者や何か意にそぐわない者への攻撃性表出を容認する部内格差風土を創り出すこととなる。この格差風土ができてしまうと、選手自身がいじめ阻止行動を起こすことは不可能に近い状況に陥るのである。

一方で、指導者サポートが被疎外を減少させている点にも注目したい。指導者が選手に対するサポートとしての「理解する」「認める」「気にかける」「相談にのる」は、選手のモチベーションを高めるのみでなく、チーム風土の醸成にもつながるのである。つまり「無視する」「認めない」「失敗に対する厳しい批判」など、選手同士の関係性攻撃ともいえる疎外を軽減し、温かいチーム風土を形成することが可能となる。

しかしサポートについては注意しなくてはならないことがある。それは女子において、指導者サポートが多いほど被攻撃が高まる傾向が示されたからである。福島市内の中学生500名を対象に行われた調査によると、部活動で指導者が十分に指導してくれないという悩みは男子(8.2%)よりも女子(20.6%)で多い(澤口・関岡, 2003)。つまり女子の方がより指導者との直接の関係を求めており、指導者からサポートを受けることで、ストレスや嫉妬が軽減され部内いじめ被害の被疎外が緩和されることは説明が

つく。しかし裏を返せば、指導者のサポート授受への関心は女子でより高く、サポートされる人とそうでない人が生じることから、それが「ひいき」として理解され、部内いじめの被攻撃が高まる結果となっているのかもしれない。指導者は、「ひいき」とみなされないようなサポートのしかたに気を配る必要がある。

次に、競技形態の特徴であるが、部レベルが高いほど被疎外を促される傾向は、チーム競技でより強かった。これは一人のミスがチーム全体の成績に関係するために、部内でのいじめにつながる可能性が高いのであろう。一方、指導者ハラスメントが部内いじめの被疎外を高め、その傾向は個人競技の方が強いということであるが、チーム競技ではチームメイトとの風土がより影響し、個人競技は指導者との一対一の関係が強いかもしれない。いずれにしろ本研究により、男女ともに指導者の関わり方が部内いじめ被害発生の重要な要因であることが確認された。指導者がハラスメントを行わず、選手の競技レベルに関わらずサポートを提供することが部内いじめ被害防止には最も有効である。さらに、指導者は、自身の関わり方の結果として生じている部活動の練習や試合前後の人間関係にも気を配る必要がある (Curry, 2013)。

5-3 精神的不健康に部活動が与える影響

次に、精神的不健康に部活動が与える影響について見ていく。イライラ感、不安感、否定的思考などの神経症的症状および人目を気にするなどの対人不安とともに、部内いじめ被害および指導者ハラスメントの影響が大きかった。係数の大きさに少々の男女差が見られたものの、指導者ハラスメントは、直接的に、そして部内いじめのうちの疎外される経験を通して間接的に、選手の神経症的症状を高めていた。一方、指導者ハラスメントは、直接的に、選手の対人不安を高めていた。このように指導者の影響力が大きいことを、まず指導者は留意する必要がある。

以上で示されたように、精神的不健康が指導者や仲間関係という人間関係により引き起こされるとするならば、部活動が健全育成のための教育活動という趣旨とは異なるものになってしまう。中学生にとっての部活動集団は、学級以外で生活の中心の場所となるものであり、部内の人間関係が学校生活のストレスの一因となりうる (吉村, 1997)。部内における評価が低い生徒は、部活にも学級にもアイデンティティを感じにくく、居場所を見出すことができないと論じられている (越, 2007)。つまり、部内の人間関係が学級での生活にも影響を与えるのである。

指導者からのハラスメントや部内いじめ被害による部活動への不適応は、学校の不登校につながる大きな要因となりえ、早急の改善が求められる。そのためには、まず指導者の指導スタイル改善が急務である。指導者の指導スタイルの改善に向けて、日本中学体育連盟は部活指導者の研修において、生徒理解やコミュニケーションの取り方、怒りのコントロールなどを取り入れた研修を実施している。その他にも内省やメンタリングを取り入れることで教師と生徒の相互作用を改善した方法 (Zan & Donegan-Ritter, 2014) などを積極的に取り入れることも提案したい。指導者自身で指導方法を変容させることは難しいため、自身のコーチングの様子をビデオに撮影してメンターと話し合うことも有効である。その他にも、いじめは絶対に許さないという態度をしっかりと示しながら (Rees, 2010; 山岸, 2002)、生徒の意見を積極的に取り入れた指導や全員が活動できる部活を目指すこと (澤口・関岡, 2003) が求められるであろう。

5-4 今後の課題

本研究では、指導者ハラスメントが部内いじめ被害を促し、選手の精神的不健康へ影響を及ぼすことが示唆された。従来の研究では、強豪チームほど体罰が多いということまでは明らかになっていたが、言葉や態度による攻撃はあまり対象



とされてこなかった。本研究では、このような攻撃も含めた「指導者ハラスメント」が部内いじめ被害へ直接関連している結果を示し、今後の部活動の見直しに向けての重要な知見が得られたと考える。部活動におけるいじめや部活動への不適応による不登校を防止するために、指導者の関わりを含めた検討が可能となることが本研究の教育的意義となろう。

しかし本研究は、指導者を起点としてモデルを検証したが、横断的な研究にすぎないという限界は否めない。また、なぜ指導者がハラスメントを行ってしまうのかについては明確になっていない。例えば、何としても勝たせたいという勝利至上主義がハラスメントを促しているのか。または自身の競技経験の中でハラスメントが当然であったため、世代間連鎖としてハラスメントを行うのか。あるいは部活動の指導と教員としての日常業務のバランスが取れずストレスが溜まった結果の行動であるのかなど様々な理由が考えられる。今後は指導者がハラスメントを起こす理由という視点から指導者のサポートや意識

改善に示唆を得られるような研究が必要となる。

次に、本研究の課題としては、競技レベルの偏りの問題が挙げられる。特に女子では非レギュラーが75.5%を占めた。男女別モデルでは、個人の競技能力による影響が男女で異なっていた。しかしながらこれはレギュラーの女子が少ないために特異な影響が出た可能性が否めない。今回の分析ではサンプリングの調整ができなかったことから、これらは今後の課題として挙げておきたい。

最後に本研究の限界点は、中学生の部活に関する研究であったが大学生を対象に回想法を用いて調査している点である。つまり経験から4年経過しているため、記憶の薄れや美化などもありうる。しかしながら、時間があいても思い出せるということはそれほど強く記憶に残る経験であったと解釈もできる。このような限界を踏まえながら、今後は指導者を対象とした調査、現役の中学生を対象とした調査など多角的な調査が望まれる。

文献

- Curry, T., 2013, "The Culture of Team Sports", *Exceptional Parent*, 43: 8-9.
- 長谷川祐介, 2013, 「高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み——指導者の暴力、部員同士の暴力・いじめに着目して——」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』35: 153-163。
- 秦政春, 1999, 「いじめ問題と教師——いじめ問題に関する調査研究(2)」『大阪大学人間科学部紀要』25: 235-258。
- 本間友巳, 2003, 「中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応」『教育心理学研究』51: 390-400。
- 神奈川県教育委員会, 2013, 「神奈川県からすべての体罰を根絶するために」(<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/608850.pdf>, 2016年6月20日確認)。
- 香取早苗, 1999, 「過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究」『カウンセリング研究』32(1): 1-13。
- 近藤良享, 2014, 「スポーツ指導と体罰——倫理なくしてスポーツなし」富永良喜・森田啓之編著, 兵庫教育大学企画課社会連携事務室編『「いじめ」と「体罰」その現状と対応』金子書房, 115-130。
- 越良子, 2007, 「中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響」『上越教育大学研究紀要』26: 357-365。
- 三木英正, 2013, 「現場からみた運動部活動」『現代スポーツ評論』28: 84-92。
- 三島浩路, 2015, 「仲間からの排斥が将来展望に及ぼす影響」『現代教育学部紀要』7: 13-20。

- 文部科学省,2013,「体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について(通知)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1331907.htm,2016年6月20日確認)。
- 文部科学省,2016,「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf,2017年6月2日確認)。
- 森川貞夫,2013,「日本の集団主義と学校運動部」『現代スポーツ評論』28:75-83。
- 森田洋司・清永賢二,1986,『いじめ——教室の病い』金子書房。
- 中井大介・庄司一子,2009,「中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連」『教育心理学研究』57(1):49-61。
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和,2009,「児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響——学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して」『教育心理学研究』57(3):324-335。
- 大野俊和,1996,「被害者への否定的評価に関する実験的研究——「いじめ」の被害者を中心として」『実験社会心理学研究』36:230-239。
- Rees, C.R., 2010, "Bullying and hazing/initiation in schools: How sports and physical education can be part of the problem and part of the solution", *Physical Educator-Journal of Physical Education*, 43: 24-27.
- 三本木 温・高橋健太,2008,「部活動のあり方を考える」『八戸大学紀要』36:151-156。
- 佐々木万丈,2004,「スポーツと子どものストレス」日本スポーツ心理学会編『最新スポーツ心理学——その軌跡と展望』大修館書店:55-67。
- 澤口裕太・関岡康雄,2003,「運動部活動における活動意識に関する研究——中学校運動部活動参加者を対象として」『仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集』4:41-47。
- Smoll, F. L. and Smith, R. E., 2002, *Children and Youth in Sport: A Biopsychological Perspective*, Iowa: Kendall/Hunt. (杉山佳生,2008,「スポーツによる子どもの心理社会的発達——親および仲間の影響」市村操一・杉山佳生・山本裕二訳編『ジュニアスポーツの心理学』大修館,59-72。)
- 杉本厚夫,2013,「混迷する学校運動部」『現代スポーツ評論』28:36-47。
- スポーツ庁,2017,「運動部活動の現状について」(http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryu/_icsFiles/afieldfile/2017/08/17/1386194_02.pdf,2018年2月13日確認)。
- 富江英俊,2008,「中学校・高等学校の運動部活における体罰」『埼玉学園大学紀要人間学部編』8:221-227。
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵,2015,「スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラスメント容認志向」『東京未来大学紀要』8:93-103。
- 植村和伸・友添秀則・清水諭,2013,「運動部活動を考える」『現代スポーツ評論』28:19-35。
- 山岸俊男,2002,『心でっかちな日本人——集団主義文化という幻想』日本経済新聞社。
- 吉村 斉,1997,「学校適応における部活動とその人間関係のあり方——自己表現・主張の重要性」『教育心理学研究』45:337-345。
- Zan, B. and Donegan-Ritter, M., 2014, "Reflecting, Coaching and Mentoring to Enhance Teacher – Child Interactions in Head Start Classrooms" *Early Childhood Education Journal*, 42: 93-104.